

資料編

➤「社会的弱者」をどう定義するか

- ・今回の調査で「社会的弱者」をどういう人たちと定義するか。アートが支援するのは、病気の人や被災した人たちなど物理的あるいは直接的な被害をこうむった人なのか、それとも社会全体の構造的矛盾が産み出す精神的・身体的弱者を対象とするのか。初めにそれを明確にしたほうが良いと思う。
- ・直接的な震災の被害者とか病棟でずっと過ごさねばならない患者さんとかに対して文化芸術が支援するというのは、今日では目に見えやすく、偽陽性機関などの比較的予算もついて事業化しやすいものになっている。私も阪神大震災の時には神戸にいたが、芸術家の人たちでさえ芸術とか言っている場合じゃないと、むしろ物質的な復興のほうが重要という感じで、芸術文化と言うことが憚れるような状況があった。その時、個人的には「阪神淡路アートプロジェクト」に携わり、芸術活動は復興支援に何ができるかという主題に取り組んだ。東日本大震災の時には震災発生とほぼ同時に芸術文化系のプロジェクトが立ち上がり、阪神淡路の時と比べて芸術を復興支援に活用していこうという動きは豊かになった。
- ・近年「社会的包摂」という言葉が叫ばれ、芸術活動が社会の中のさまざまな課題を「解決する」まで行かなくても、「矛盾や問題がある」ことをあぶり出したり、解決のヒントを提示したり、あるいは人脈の掘りおこしを行うなど、アートが明らかにできることがある。例えば過疎地域や商業的に成り立たなくなったエリアとかに関わっていく、いわゆる「アートプロジェクト」* が1990年代以降豊かになってきたという流れがあり、当たり前のようにそういう蓄積が東日本大震災の時にもアートが被災者を支援するという動きになった。一足飛びではなく、95年の阪神淡路大震災から約20年経って起こった東日本大震災においてアートによる復興支援が可能になったと思う。

(*「アートプロジェクト」…作品そのものより制作のプロセスを重視したり、美術館やギャラリーから外に出て社会的文脈でアートを捉えたり、アートを媒介に地域を活性化させようとする取組みなどを指す)

➤見えにくい「弱者」への対応

- ・明らかに被災者や病気の人など今すぐ支援を必要とする人への文化芸術的な支援は確実に今後も続いていくと思うが、目に見えにくい「社会的弱者」、例えば子育てに悩みながら孤立している若いお母さんとか、幼児虐待に行ってしまうような状況にある人とか、引きこもりや不登校の子どもたちとか、非正規雇用の若い世代だったり、見えづらい「サイレント・マジョリティ」に対する支援でアートに何ができるか。あるいは戦後復興の象徴である大阪万博に携わった労働者が高齢化し、独居老人となって多く住んでいる釜ヶ崎のような地域の「復興」にアートはどう関われるか。あるいはアートに携わるオーバードクターの研究者が、高学歴が足かせになって就職できなかつたり、国内で盛んになっている国際展で雇用される若い世代のアートマネージャーの雇用形態が不安定であったりする現実がある。そういうあまり世間には見えていない「社会的弱者」への支援が今後課題になってくると思う。
- ・今まで「アートプロジェクト」としてやられてきた実践知は蓄積されているのだろうが、それを継続的に展開していくにはどうすればいいのかという課題はある。言い方は悪いが「老害」というか、一定の権力とお金も時間も持っているハイクオリティの高齢者が若い人の何かを奪

っているのではないかという見方もできる。福祉はそういう人たちに手厚く設定されているのに、若い人たちが貧困状態にある。ケータイやインターネットとかネットワークですごく豊かになっているように見えるけれども、若者や大学生に芸術活動にかけられるお金がどれほどあるか。交通費や食費を削ってケータイ代に回すとか、インフラにかかるお金が以前とは全然違ってきている。そういうベーシックな現実の問題がいろいろあると思う。

- ・そのあたりは芸術文化と直接関係があるのかどうか悩ましいところだ。私にしても今日は京都の大学に非常勤で教えに行っていたのだが、若い人は何か絵を見に行きたいとか芸術活動に従事したいと思っても、総じてお金がなくバイトで時間がないという状況にある。個人的事情もあるが、日常生活にかかるインフラのお金が大きいと言うか、エンゲル係数が変わってきているようにも感じている。

➤アートボランティアに潜む課題

- ・1995年の阪神淡路大震災で「ボランティア」という言葉が使われるようになった。今年の3月から6月にかけて、ここのアートエリアB1を会場に、東日本大震災5年目ということもあり「災害にまつわる所作と対話」という展覧会をやった。それは阪神淡路や東日本の震災に限らず、古くは第二室戸台風やチリ沖津波とか古今東西のいろんな災害をテーマに、アーティストだけでなく、仙台メディアテークや女川町のNPO、それに大阪市の広域避難所になっているここの中之島まちみらい協議会が加わってくれた。そういう広い視野で見た災害に対して何を考えて対話し、どういう所作をとればいいのかを考えるため、一軒家に見立てた器の中に作品や資料を展示した。
- ・約100日間いろんな人を呼んで対話したのだが、そこでもやはりボランティアの課題が変わってきていることが指摘された。災害のボランティアをやりたいという人は増えているものの、文化芸術のボランティアに関しては、先ほどの「老害」ではないが、お客様を迎えるというホスピタリティよりも自分たちのイニシアティブを取ることに躍起になる人が増えてきたりして、弊害がいろいろ出てくる実例もある。ボランティアを設定する側の責任もあるのだが、我々の企画では「サポートスタッフ」と呼び、企画をサポートしていただく人と明確に位置づけ、継続的な関わりによって慣習化してしまう弊害を避けるために、毎回解散することの弊害は声の大きな人が存在感を示して毎回参加することで新規の参加が難しくなったりもする。そうした前提が、来場者などのお客さんに対応することにも影響することもあり、そのあたりの距離感を持ってもらわないと困るということだ。
- ・ボランティアを募集すると、見返りに学芸員の話や勉強したりできるから集まるのだが、そういう目的の人はお金を払って知識を増やせばいいわけで、本当にこの展覧会を市民に届けたいと思える人でないとボランティアとしてはふさわしくない。ホスピタリティが必要で市民に届けるという気持ちを優先してもらわないといけない。ひょっとしたらアートボランティア制度が何か勘違いをもたらして、社会的弱者をつくり出しているのではとってしまう。制度設計する側の責任が大きい。ボランティア意識のある学生や若い人たちのフォローをどうしていくかは今後の課題だと思う。

➤さまざまな関西の社会包摂型アート活動

- ・社会包摂型では、大阪、関西にはわりと「コルム（NPO法人こえとことばとこころの部屋）」の上田伽奈代さん（詩人）のように、かなり以前から社会的弱者と表現に取り組んでい

る人がいて、ようやく根づいてきた。彼女は「釜ヶ崎芸術大学」としてずっと釜ヶ崎の独居老人と向き合い、表現活動を誰もが可能とする環境づくりに取り組んできた。最近では、簡易宿泊所をまるごと1棟借りて1階をカフェ、上はドミトリーのようにして活動している。あと地域に埋もれている魅力を掘り起こすことによって昔の記憶を引き出す活動をしているアートNPOのRecip (レシップ)とかRemo (レモ)とか、表現の先にあるコミュニティとの接点を持ちながら活動を展開している。

- ・最近大阪から神戸の長田に移ったダンスボックスという集団は、多国籍の方々が住む町に住みながら各国の舞踊をテーマにしたコミュニティのプロジェクトをやっている。大阪のフェスティバルゲートからある種の行政都合で撤退を余儀なくされたのだが、結果的にはそれが良かったのかも知れない。フェスティバルゲートでずっと活動するよりも、長田に移り住むことによって地域の課題と出会い、それをアートで解決していくという主題を拡張できるようになった。移転は大変なリスクだけれども、アーティストはそれだけバイタリティもある。いろんなテーマを発見する力、それをまた自分たちの力にしていく力がある。奈良の「タンポポ」(はたよしこ氏)も障害者の支援を行っているし、滋賀にも「NOMA」という福祉と芸術をテーマ掲げた施設が一軒家をアウトサイダーアートのギャラリーにしている。滋賀県の文化行政はアールブリュットに予算をつけたりして、福祉とアートというテーマに関連した施策に力を入れているように見える。関西は総じてこのテーマで頑張っていると思う。

➤若者が能力を発揮できる京都

- ・京都という観点では、大学生には京大生など芸大生も含めて多いので、学生の自治能力が高いという印象がある。京大を始め都心部に大学が多いし、都心を外れた地域の大学もたいてい30分圏内にあるから、それは連携する場合に大きな強みになっている。大阪や神戸に比べると大学コンソーシアムが盛んで、文化芸術活動もそういう意味で根つきやすい。アーティストもたくさんいる。ただ発表したり、それを産業化していくということになるとまだまだ厳しいかも知れない。
- ・京都芸術センターや文化芸術に関連する大学や団体が持っているホールとかスペースとか考えると、行政がテコ入れしなくても、それぞれがそれぞれの場で自立的に活動しているように見える。レジデンスのプログラムは行政が支えているが、HAPS (東山アーティスト・プレイスメント・サービス)は、町家を改造してアーティストのアトリエなどにしている。そのほかにも「HANARE」の活動とか。若い人たちがそういうコミュニティを作りやすい環境にある。アトリエ兼住宅を貸し出す仕組み、学生は4、5年で入れ替わるから、大家さんもそれをよしとする仕組みとかがあるのだと思う。若い人や大学生が高い自治能力を発揮できる仕組みがベースにあるように見える。
- ・だから京都では大きな「花火」を打ち上げる必要がない。発表は別の都市でやるにしても、住まいと制作の場、実験の場として京都がある。京都エクスペリメント (国際舞台芸術祭)とか舞台芸術の新しい試みもある。西部講堂などはそれなりに実験の場として頑張っていたけれども、京都では、今まで舞台芸術が不毛と言われていた。しかし、ロームシアターができたことで新しい可能性が出てきた。ライブハウスの磔磔とか地道に頑張っていたが、オルタナティブな若い世代が活躍できるアンダーグラウンドな場が結構ある。そういうある意味社会的弱者に対する地道な支援に、行政も目を向けるべきではないかと思う。

➤「観客」は豊かに「演者」は貧しくというアンバランス

- ・京都芸術センターも町なかにあるが、もともと町に開かれた小学校とかの延長線上に京都の文化は醸成されてきたという印象がある。芸術センターにはディレクター制度があり、それはそれでいいのだが、若い人が3年ごとに替わってしまう。問題はその後どうするかだ。人脈を作ったりとか、何か腰を据えて長期のスパンで事業を手がけられる仕組みがない。最近財団でプロパーとして雇用された人が1人いたと思うが、それ以外の人は3年ごとに替わっていくと聞く。芸術環境は、一般に薄謝でしかも任期付きなのにバリバリ働く人で支えられている。いろんな芸術祭とか文化オリンピックとかが雇用を生むのはいいが、その後どうするかという問題がある。芸術センターとかがH A Vになってプロフェッショナルな技術を持った人をずっと雇い続けるなどという課題がある。
- ・アートで仕掛ける側の社会的弱者の救済が重要な課題だと思う。それに関連した施策を京都市がやればすごく新しい施策になる。特に大学生とか芸大生とか文化芸術の資源をいちばん持っている都市だから、そういう人材バンクに目をつけて施策を打てば、他都市にない独自の施策になる。継続的にそれをやっていく。税金を使ってやる限りいろいろ難しい問題もあるが、文化は「広く浅く」より集中投資していかないと新しい芽吹きは生まれにくい、育たない。
- ・社会包摂型のアートでは大阪市が今いくつか事業をやっているが、「社会に役立つアート」を仕掛けていく仕組みや財源があっているとは思いますが、一方で小演劇とか地道な活動、いわゆる本来の文化振興の部分が「谷」になっていてそういうベーシックな部分への支援が不足している。社会包摂は社会に役に立つアートということを大前提にしているが、私は福祉に役に立つのだったら福祉から、人権に役立つのなら人権から予算を持ってくるべきだと思う。今は文化振興の文化芸術基本法の中の予算から社会包摂だけに流れていく仕組みになっていて本来の芸術振興を担う人や場所に予算が流れにくいように感じている。足元がどんどん疲弊して行って「役に立つ」ものだけに流れていく仕組みになっている気がする。社会全体としても行政の文化芸術への価値観としても…。行政一般の中の予算取りの仕組み自体を考え直してほしいと思う。アートに従事している人たちが社会的弱者になってしまっている。「観客」はどんどん豊かになっているのに「企画者や演者」は貧しくなっていくというアンバランスに危機を感じている。

➤若いアーティストは京を離れない?!

- ・京都の場合は、明治期に都が移った段階で文化で食べていくという社会的な意識が出来上がっているように思える。新しい文化を受け入れる能力も高く、だから若いアーティストは京都を離れない。いくら他所が豊かであっても…。東京へ行っても戻ってくる若いアーティストは多いと思う。大阪の芸大生が東京に出ていくのは、彼らの価値観が東京を向いているから。しかし京都は別の方向を向いていて、価値観自体別のものだと思う。私の実感だが、京都はアーティストの卵はものすごく多い。京芸、造形芸大、嵯峨美…芸大の卒業生でそのまま京都に住んでいるケースは多い。彼らが弱者としてどういう支援が必要かとか調査してはどうか。
- ・おそらく先輩後輩のつながりとかがあって生きていきやすいのだと思う。2月、3月の卒業制作展の時期に共同でアトリエを活用するアトリエ開きをよくやっているが、制作活動をそこで継続し、そのまま移り住む。卒業制作展では青田買いではないが、ギャラリストも含め全国、全世界からいろんな人が見に来る。今は静まったがアートバブルのころはすごい勢いだった。

昔は美術館やギャラリーはエスタブリッシュされた一定以上のキャリアの人しか発表できなかったため、若い人たちは自分の作品を見てもらうために、またそれに呼応したギャラリストが開拓するために貸画廊という仕組みがあったが、今や公募展やカフェギャラリーが増え、若い人たちが発表する機会がかなり増えたので、10万20万出して貸画廊を借りなくてもやっていける。要するに、見てもらう機会と仕組みが増えた。時代のニーズが変わってきた。あるいは青田買いするコマースギャラリーが増え、ホテルもアートフェアをやるとか、質の問題は別にして発表の機会は格段に増えたということだ。学生が自分の作品をプレゼンして販売するという仕組みはコンソーシアムのような形でやっている。

▶未来のまちの創造者

- ・「アーツカウンシル」については、あちこちにその名称の組織が生まれているが、本当の目利きが役割を担っているかという問題がある。声の大きい人がやりたいイベントにお金をばら撒いているとの指摘もある。本当に芸術文化の発展に必要で地道に投資していくに値する案件を決める、英断していく仕組みになっているのかどうか…。行政から自立した、本来のアートカウンシルの創設ということでも、京都はいちばん可能性があるように思う。伝統的芸術文化の目利きは文句なしにたくさんいるし、それが産業や経済につながっている。ただ現代アートに関する目利きの養成は今後の課題かも知れない。
- ・私の今回の提言としては、震災被災者や小児病棟の患者、精神を病んでいる人、障害を持つ人といった人たちを芸術表現によって支え励ますだけでなく、アーティストやアートマネージャーやアートボランティア等、そうしたアート環境をつくり出す、仕掛けようとする若い人たちへの支援が今最も必要ということに尽きる。誤解を恐れず言うなら、病気の人というのは病院に通って本来の治療を受け、なおかつさらにアートで支援を受けるとするのは「プラス」の部分になる。しかし、それを支援する人たちの現実バイトで苦労しながら活動している。芸術はぜいたくという前に、それをやり続けることがどれだけ大変か。ある種の日雇い労働で環境を創り出し従事しているようなものだ。
- ・クーラーはぜいたくとか、シングルマザーや生活保護でよく話題になる「ぜいたく」というのは法令として決まっていると思うが、クーラーがなければ今なら死んでしまう。同じように、アートがぜいたくではないこと、不可欠のものであることを我々がもっと主張していかないといけない。社会包摂型のアートが優勢なだけに、本来の文化芸術振興の基礎の部分がどんどん弱体化し衰退していく危険性がある。文化芸術の現状を俯瞰していてそんなことを思う。
- ・京都は全国から学生が来る。芸大にも集まる。芸術に関わることでできる人材をいかに京都にとどめるか、いかに交流人口を定住人口にしていくかは京都市の大きな課題だと思う。そのためには家賃補助とか活動補助とかの施策はできる。芸術系大学生は一定の数になるし、アーティストの卵だけでなくアートマネジメントを学ぶ他大学の学生についても、学生支援あるいは今後の労働力確保と考えてそうした施策を打つことで、彼らが「京都は住みやすい」となれば未来の京都のまちの創造者になっていく。京都は文化芸術についても伝統があるし、伝統は革新の連続なのだから革新の素地を作る人材を絶やさないと次の時代の礎になっていくのだと思う。

➤ 誰もが「弱者」になりうる時代

- ・企画書は「社会的弱者」とあるが、自分もこの言葉を使って原稿を書いたら、ある偉い先生から「どういう定義で使っているのか」とクレームがついた。行政はこの言葉をよく使うのだが、自分は「生きづらさを感じている人たち」と言い換えたら、それでOKが出た。ずっと障害者と共に活動してきたのだが、子どもの貧困とかの問題に取り組んでいる人からすると「障害者は恵まれている」らしい。障害者については、長年の運動の蓄積の成果として世界的にも制度が整ってきたが、貧しい子どもへの救済制度はまだ乏しい。「障害者をマイノリティと言うな」とお叱りを受けたこともある。しかし、我々の問題意識は、障害者も子どもも高齢者も「制度」から外れている人たちがたくさんいて、その人たちに目を向けたいということで、それが我々の幅広い活動につながっている。
- ・木ノ下先生がご指摘のように、アーティストやアートを支えている人も「弱者」と言える。障害者のほうは年金とかいろいろあるのに対して、アーティストはみんな貧しく救う制度がないからだ。今やパターン化された「社会的弱者」という意味では、障害者から子ども、高齢者、LGBTまで言うのかも知れないが、今や多くの人が誰もが「社会的弱者」になろうとしているし、なる可能性のある時代と言える。そういう問題意識は持つておく必要があると思う。

➤ 「アートの社会化」「社会のアート化」

- ・1973年からこの仕事を始めたのだが、自分はもともと新聞記者だった。大学を出て新聞社に入った時期は、ちょうど日本は高度成長期で元気な時代だった。しかし、一方で高度成長の恩恵を被っていない人がいることに気づいた。それが障害のある人たちで、新聞でキャンペーンを始めたりした。そこが出発点になる。アートの分野にしたのは、ちょうど高松支局に赴任した時、たまたま知り合った現代美術の評論家が知的障害者施設で展覧会をしているというので一緒に見に行っただけがきっかけだ。その時「これは子どもの絵ではない」と思い、ものすごく可能性があると感じた。たまたま大学生のころ、岡本太郎の『今日の芸術』という本に「今日の芸術は美しくあってはならない。…心地よくあってはならない」という宣言があり、それを思い出して彼らの絵は「今日の芸術」になる可能性があると思った。養護学校とか施設とかいろんな所の作品を見に行っただけ。しかし、誰も見向きもしないし陽の目を見ない。どの作品も「私を見て」と言っているような気がした。転勤で奈良支局に来て、独力で作品を集めて、今で言う「障害児作品展」を個人で開催した。それが源流になる。
- ・もう1つ注目したのは詩だ。障害者の思いが言語化されている。これにメロディをつけて歌えば面白いと思った。新聞記者の振り出しは京都だったのだが、そこで知り合った、今も詩を書いている、ある詩人が私にアメリカのフォークソングのことを教えてくれた。アメリカではフォークソングを通じて公民権運動をやっていることとか、そういう歌を日本に紹介している人がいることを教わった。今度ノーベル文学賞をもらったボブ・ディラン全盛の時だ。その時に障害のある人の詩を見た時に日本のフォークソングとして行けると思った。そこで音楽をやっている若者にメロディをつけてもらいコンサートを開いた。それが「わたぼうし音楽祭」になる。今年で42年目に入る。
- ・そういう活動をしているうちにここの建物を作る話になった。音楽という言語芸術だけでなく、もっと幅広く表現活動を展開できないかとずっと思っていた。1995年阪神淡路大震災が起き、

我々も救援活動に携わったが、本質的な「復興」とは何かということで、芸術文化の力を活かそうということになった。そこで「エイブル・アート・ムーブメント」を立ち上げた。訳すと「可能性の市民芸術運動」。狙いは「アートの社会化」「社会のアート化」だった。アートは美術館やギャラリーに収まっているものではなく、社会の中に出ていき生活とアートが繋がっていくようにならないといけない。それこそが復興——そういう思いだった。

➤「乗って」くれた大手民間企業

- ・幸いトヨタ自動車という大企業が「乗って」きた。あのころバブルがはじけて、それまで大きなお金をかけてウィーンフィルとかの冠スポンサーになっていたのが、企業の社会的貢献活動を見直すということで地道に地域の障害者アートを支援したいということだった。それが「トヨタ・エイブル・アート・フォーラム」で、1996年から7年間で全国各地で63回開催した。それが今日花開いている障害者アートの、土を耕しタネを蒔き…という地盤になった。たいへん賢明な選択だったと思う。今の企業CSRの先鞭をつけたことになる。その後、関西でもそれを見て関西電力や大阪ガス、パナソニック、住友生命といった大手の民間企業が我々をバックアップしてくれた。幸い関西の企業が熱意を持って地元の文化を支えようという機運が盛り上がった。
- ・トヨタが終わった後、今度は明治安田生命が「エイブル・アート・オン・ステージ」という演劇・ダンスなどのパフォーマンスを5年間で2億かけて支援してくれた。近畿労金が支援して今も続いているが、「ひと・まち・アート」という2府4県で障害者アートをベースにした生活とアートを結びつけるコミュニティ・アートの実験的試みを支援してくれた。いずれの企業もメセナ協議会から賞をもらった。特に近畿労金などは文化庁長官賞をもらったので、やめるにやめられないのではないか。
- ・そんなふうに、これまで主に企業からの支援を受けてきたことが我々の活動の特色になる。一方で、行政からの支援はあまりない。奈良県はお金がなく、文化行政でなく文化財行政が主であることもある。芸術文化はお金がかかるし効果はすぐに出ない。けれども蓄積すると大きな実をもたらす。ただ奈良県はこの建物の土地を無償で貸してくれていることは感謝しないといけない。当時の知事が「わたぼうし音楽祭」で挨拶を頼んだりし、満席の会場に感動して県有地を無償で提供してくれたものと思う。ここには世界から視察に来る。一昨日も韓国からうちでも作りたいという都市の人が来た。こういう内外に知名度のある施設が奈良県にあるということで、少しは奈良県のイメージアップに貢献していると思う。そういういきさつがある。ただ、奈良県は2011年から奈良県障害者芸術祭開催事業を実施。たんぼぼの家が毎年受託し、県内の障害のある人のアート活動のサポートや発表の機会を作っている。（後述の「プライベート美術館」や「アートクル」などはこの事業で実施した。）
- ・初めてここのアートセンターを建てる時に日本財団から助成を受けたのだが、「この際思い切ったことを…」と福祉施設と一体になったアートセンターを作った。福祉の人にすれば革命的な事だったのだろうが、そういう思い切ったことをやらないと注目されないと考えた。日本財団の人たちは乗ってくれた。昨年（平成28年）夏に香芝市に「Good Job!センター」を作る時も助成してくれた。長くお世話になっているが、いろいろな先駆的な試みが評価されているのだと思う。

➤身障者へのまだ根強い偏見や差別

- ・特に福祉分野の人はどうしてもこういう試みに乗れる人は少ない。エイブルアートにも参加は少ない。アートを余暇活動としては理解できるが、アートは社会の何の役に立つのか——日本人の文化や芸術に対する古い考え方がまだある。そういう意識を打破するためにも、こうした思い切った試みで「福祉施設も変わる」という認識を持ったと思う。福祉はある程度制度に守られている。そこで思考停止してしまい、それ以外のそれ以上の発想が出てこない。保守的で守りに入っている。我々は制度から漏れる人を救うことから始まった市民運動だが、そういう制度の外の人を救うと言う発想と意気込みを持ってほしいと思う。
- ・昨年（2018年）7月の相模原の障害者施設の殺傷事件で、私はこれまでの運動で日本人の障害者に対する意識は変わったと思い込んでいたのだが、変わっていなかったことを痛感した。犯罪を犯した元施設職員の精神的問題というような書き方をしてあるが、ショックなのは普通の若者が「優生思想を確信した」と言っていることだ。「こんな役に立たない人間たちを、なぜ苦勞して世話しないとイケないのか」と。あの事件の舞台となった施設はとにかく大き過ぎる。管理運営者が親の会で当初は真面目に愛情を持って見ていたのだろうが、時代とともに職員教育が薄れていったのだろう。うちもそういう職員教育は心していかないとイケないと思っている。今の若者は福祉施設に「就職」してくる。経営者はそれを意識しておかないと「こんな意味のない存在を…」という意識が、残念ながら芽生える可能性がある。
- ・その中のもう1つの問題は、被害者を匿名にしたことだ。どんな障害を持っていても1人の個人だ。名前がないことにすれば存在がなかったことになる。人間にとって名前は大事で、匿名にすることで二度殺されたのだと思った。京都府の障害者芸術祭「とっておきの芸術祭」の委員をしていても20回ほど続いているのだが、ずっと気になっているのは1回目から精神障害の人は「Aさん」「Bさん」。実名を出すことに家族のほうに抵抗があるらしいが、行政に求めることはそのあたりを社会に働きかけてほしいということだ。「かけがいのない名前を伏せることはやめよう…」と。そこから起こる偏見や差別は行政がなくさないといけない。行政には、そういう基本的なことで期待している。こうした芸術祭は他ではつぶれてしまい、続いているのは京都くらいで、それはそれでちゃんと評価しないとイケない。

➤企業の商品開発にも関与

- ・これからは芸術文化の時代だ。昨年末東アジアの障害者の展覧会とフォーラムで上海と南京に行ってきたが、日・中・韓ともに力を入れて行こうということになった。面白かったのは、3日間共通していたのは「文化の経済化」「経済の文化化」だと思った。皆そういう方向を向いている。その展覧会の話は、今奈良や京都で動いている政府・行政レベルの東アジアのプロジェクトの話とは別の話だ。我々は企業と組んでいることが大きな特長だ。企業は我々と組んで商品化を図る。例えば、奈良の地場産業である靴下メーカーと組んで、うちのメンバーがデザインした靴下がベストセラーになっている。東京新宿の伊勢丹が障害者アートでデザインした男性用パンツも完売したし、それ以来男性下着が派手になったとか言われている。伊勢丹などはこちらが持ち込んだ企画だ。伊勢丹に負けてはイケないと大阪高島屋も乗り出してきた。
- ・企業も社会貢献とは言え、単にお金を出すのでなくてできれば商売につながる方向とかを考えると、そういう方向を戦略的にとっているのではないか。障害者のほうもいろんな表現を「障害者アート」として展覧会とか美術館で飾られるとかだけでは収入に結び付かない。大事なこと

は、彼らは基本的に制度で保証されているけれども低い年金しかないし、収入が低いということだ。これは基本的に解決しないといけない課題で、それをアート・デザイン・ビジネスというトライアングルでやれないかというのが我々の方向だ。「アートは素晴らしい」と言うだけの時代は終わって、アートをデザイン化してビジネスにつなげていく「文化の経済化」だと思う。アートの方も企業の人もお互い張り切ってやる。当初エイブルアートを始めた時から、障害者の能力を高めるとともに、障害者に対する社会的イメージを高めたいと思った。2つのことからスタートした。言葉を変えると、障害のある人の今の社会保障は所得の再分配、つまり税金を国が吸い上げて弱いところに下ろしていくという…。しかし、これからは所得の再分配だけでなく、可能性の再分配もやらないといけない。可能性を掘り起こしてデザインとかで表現し、生活を豊かにしていくということが大事だと思う。

- ・ヒット商品目指して頑張って収入を増やすことを目指す必要はあるけれども、質的な転換が必要だ。日本人が直面しているのは、ただの経済成長だけでいいのかという問題で、違う成長のあり方もあるのではないかということだ。皆すぐ儲かる、儲からないと聞くけれども、それだけではなくて、アーティスト・イン・レジデンスで海外に招かれたり、企業の新しい工場の壁画を描くことに加わったりする中で、本人たちはそれなりに準備したり、生きがいを見出したりしていく。
- ・今は文明史的に転換期にある。我々も進化していかないといけないし、今は新しいものづくり、新しいコトづくり、つまりプロダクト・イノベーションが必要だと思いやろうとしている。新しい絵や建物をつくるだけでなく、物語をつくる価値をつくる「コトづくり」が必要な時代だと思う。

➤障害を持つ人の多元的共存を

- ・ここは「アート」と「ケア」を同時にやる施設で、地域の障害のある子どもたちのサポート、1人住まい高齢者の食事サービスとか多様なことをやっている。加えてそういうアートプロジェクトの管理とか、スタッフも大変だと思う。
- ・高齢化がここまで進み、もう「障害」を小さな枠組みで括られる時代ではない。いろんなところで障害や欠落を持つ人が増える。それに向き合うのにどうするかは大問題だが、原理的に「個人の尊厳を守る」という柱を据えておくことが大事だ。福祉制度的には身体障害と知的障害とを分けたりしているが、ここは昔から混在型というか、いろんな障害を持つ人の「多元的共存」が特長で、それこそがこれからの社会のあり方だと思っている。大変だけれどもそれが時代の要請だ。現在のような病院化社会でもホームホスピスのように家族みんなで終末を迎えるという動きや、認知症でも地域で支える具体的な動きとして出てきている。病院化社会を推し進めるのではなく、家族や地域全体で受け止めるというのがこれからの社会としてあるべきで、ケアで大事なのは「全体性の回復」だと思う。よく言う「心のケア」だけでなく、生活のケア、関係のケアで「全体」を回復していく必要がある。そういう考えから、鷺田清一先生を会長にして「アート・ミーツ・ケア学会」という分野をまたがる学会を立ち上げた。そういうことが分かる哲学者は少ないけれども、鷺田先生はとにかく守備範囲が広いし理解もしてくれる。自由な発想と直感によるアマチュアリズムが大事だと思う。今は皆、細分化されて狭い領域で専門家になってしまう。アマチュアがそこを横断的につないでいく役割があるのではと思っている。

- ・行政を文化化するために効果的なのは、やはり経済だ。彼らにとって文化は抽象概念だ。観光客が増えるとか、商店街が活性化するとかいう話には飛びつく。今戦略的にやっている「Good Job!プロジェクト」はデザインビジネスが絡むから、行政も振り向かざるを得ない。昨年暮れに経産省のグッドデザイン賞コンペで4,000点の中から我々は金賞をもらった。福祉から金賞が出るということで意識が変わる。グッドデザイン賞も、初めの名前は「産業デザインコンクール」だった。それも意識の変化に合わせて変わった。間口が広がったから我々も参加できて認められた。だから行政も少しずつ変わりつつあると言える。こちらは新しい技術を使うとかでアーティストを育てるつもりなのだが、行政は「クラフトマン」を育てるつもりでいる。それはそれでいいと思う。奈良市が広報紙で私のインタビュー記事を載せたいと言ってきたが、堅い行政もだんだん変わりつつある。
- ・東京とかの大都市と違って、行政からの補助金をあまり期待できない奈良県とかでやっている、民間企業とか助成財団とかにアプローチするしかなかった。ここにはその分ノウハウや知見が蓄積されてきた。大事なことは、広く伝達することで、毎年小さな規模だがアート化セミナーとかでノウハウを伝え育てていく。皆地域に帰って頑張っている。

➤子どもも高齢者も創作者として

- ・特に子どもたちへの活動については、1つは「世間遺産」という子どもに写真を撮って1点選ぶというプロジェクトだが、1点選ぶところがミソだ。もちろんプロの写真家がアドバイスするが、選ぶところで鍛えられる。たくさん撮ったものの中から、なぜその1点を選んだのか語る。それはある種の市民教育だ。これの高齢者版もやったことがあるが、高齢者はみんないいカメラを持ってきた。ただ高齢者は顔を写すのを嫌がるのだが、手を撮り合って「手は人生を物語る」という展覧会をやったことがある。子どものほうは「後世に残したい世間の遺産」がテーマだった。近畿労金の「ひと・まち・アート」プロジェクトの一環として近畿2府4県を対象として実施した。写真は費用がかからないからいい。今は途切れているが。
- ・もう1つは「プライベート美術館」。奈良を中心に障害者のアートを奈良町のカフェとかのお店にオーナーが選んだ作品を飾るというものだ。アート作品はふつう専門家や名人と言われる人が評価するのだが、オーナーが自らの感性で評価して選ぶ。成熟した市民社会をつくるためには、こういう試みが必要だと思う。これを子どもから大人までやらないといけない。
- ・今やっている「オープンアトリエ」は、障害のあるなしに関係なく、地域の子子どもたちがこのアトリエに来てアート活動できるものだ。3年目になる。今学校教育で図画工作・美術がなくなりつつある。どうも文科省は役に立たない学科はなくしつつあるようだ。そこで「アートクル（アートが来る）」プロジェクトは、小学校に障害者アーティストが先生として来るというもので、子どもたちと一緒にアート作品をつくって展覧会をやる試みだ。アーティストは見たこともないような表現をするから、子どもたちは障害者だから「可哀そう」ではなくて「すごい人!」という反応を示す。絵を描くだけでなく、ダンスの上手い子が行って一緒に振付けしたりもする。これはスポンサーはついていない。文科省も社会も芸術文化は大事だと言いながら、予算はどんどん削っていることは問題だ。昔に比べるとアートは生活にとって不可欠なものだという人は増えてきているとは言えるものの、何とか民間で支えてアートは人間にとって大事なものという意識を訴えていかないといいない。それはエイブル・アート・ムーブメントの大きな狙いでもある。生活とアートが近づいていき、みんなが鑑賞するだけでなくそこに参

加し、創作者になっていく。

- ・だからここも障害者のアートセンターだけでなく、コミュニティのアートセンターであるべきだし、ここだけでなく町のあちこちにあったほうが良い。そこには認知症の高齢者もやって来て何かやる。今はみんなの居場所がなくなっている。高齢者も子どものお遊戯みたいなことをやるのでなく創作者として活動する必要もある。昔やっていた習い事、個々人が持ち特技を今度はみんなに教える。その出番を作る。そういうことが社会のあるべき姿だと思う。小さなアートセンター、ギャラリーでいいから町なかにあってほしい。そこでみんながアートを通してつながりを作っていく、コミュニケーションが起こっていく。図書館とかの公共施設にも昔の貸本屋にとどまっているのでなく、本をベースに世界を開いていくアイデアが求められていると思う。新しい図書館はやり始めている。

➤「ダイバーシティ（多様性）」の橋をアートで架ける

- ・今年（2017年）障害者アートを企画しているのだが、大昔のクロマニオン人の壁画から始まって子どもたちの怪獣の絵までを集めて、アートの源流を見せていく、障害者があってもなくても人間のDNAの中に流れているということを「アートの源流を訪ねて」というテーマの展覧会をやろうとしている。縄文時代の遺跡から近代の能面とかを並べる。民博まで取材に行ってヒントをもらったりして、今みんな制作中だ。今あちこちで障害者の展覧会をやっているが、「頑張っています」ということを見せるだけで物足りない。もっと知的エンタメ性を持ったものをやりたいと思っている。障害者アートの表現の中にずっと人類の普遍的なものが流れているということを、どう見せるかが課題だ。
- ・今や障害者と健常者のアートを分けて提示するというのも取り払って一緒にやるべきだと思う。問題は滋賀県のアールブリュットで、文化庁がいろいろテコ入れして一生懸命やっているが、あれはおかしいのではとずっと思っている。時代の大きな流れは「ダイバーシティ」で、いろんな垣根を取り払わないといけない。壁を作って分断していくのではなく、アートという橋を架けていく必要がある。
- ・金沢の21世紀美術館で北陸の知的障害者団体が全国大会を開くというので、アートの展示を何かやりたいという話がうちにあった。条件は北陸4県が対象で、21世紀が会場を貸してくれた。タイトルが「野生の感性」の展覧会とした。ところがそこで知的障害者の親からクレームがついた。「野生とは何事か」と。彼らにとって「野生」とは「遅れている」という解釈だ。我々は「野生」を失ったから生きづらくなっていると説明したのだが…。ところがアールブリュットには参加している。どうも福祉の人たちは良かれと思ってやっているのだが、そういうすれ違いがまだあるということだ。